

# 明日への Lesson

第1週 ブック

第2週 イノベーター

第3週 クエスチョン

第4週 キャンパス

教科書に出てくる書名と著者トマス・アキナスの名を暗記した人は多くても、原典に触れたことがある人は多くはないのでは。「神学大全」は中世ヨーロッパを代表するキリスト教信仰の書物であり、西洋哲学史上の古典中の古典。全訳で40冊近い大著だが、その完結から10年余、文庫や入門書の刊行でハードルは下がりがつつある。

長大で難解なイメージの西洋中世哲学（スコラ哲学）は、キリスト教神学が大きな比重を占める。その筆頭が「神学大全」だ。信仰を持たない人が多い現代日本で読む意味はあるのか。「いま当たり前だと思っている基本的な考え方の枠組みを突き放し、相対化して新たな視点を導く重要な手がかりになる」山本芳久・東京大教授（西洋中世哲学）は大著を読む現代的意義を語る。山本さんが一昨年に著した解説書「世界は善に満ちている」は対話形式で、入門の手がかりになりそうだ。

ただ全訳は注や解説を含めると1万3千超あり、数日かけても斜め読みが精いっぱいだろう。神の存在証明（第1部）やキリストの生涯、キリスト教の儀式（第3部）など、抽象的な信仰をめぐる議論も多い。糸口はどこにあるのか。

「第2部の人間論がいい入り口になる。人間理解に深みがあり、信仰を持たない読者もなじみやすいはず」

山本さんによれば、「神学大全」は「善を基礎とする肯定の哲学」だ。卓越性や力量を意味する「徳」や、魅力的なものへの

トマス・アキナス

神学大全 (13世紀後半)

## 神とは人とは 重ねる問答

### 【「神学大全」とは】

ゴシックの大聖堂にたとえられる体系的書物。一つの共通形式のもとで、部分と全体が密接に関連している。第3部第90問で未完に終わった。

- 第1部「神論」、第2部「人間論」、第3部「キリスト論」の3部構成
- 計512の「問題」からなる
- 各「問題」はいくつかの「項」からなり、「項」は計2669ある  
未邦訳の補遺99問を除く



#### 「項」の構成

- 1 「項」のタイトルは「～は～であるか」
- 2 異論 異論 異論 … 最初にトマスの見解とは異なる「異論」が複数示される
- 3 対異論 + 主文トマスの見解 トマスの見解に近い「対異論」とトマスの見解をまとめた「主文」が続く
- 4 異論解答 異論解答 異論解答 … 2の異論に答える「異論解答」で締めくくる

### 著者のトマス・アキナスって？

Thomas Aquinas

生没年 1225ごろ～1274

- 中世イタリアの神学者、哲学者。スコラ哲学を代表する思想家
- 貴族出身。当時新興の修道会、ドミニコ会士に。ナポリやケルンなどで学び、パリ大学などで教える。「天賦的博士」と称され、聖人のひとり。カトリック神学の権威の源とされた



#### 主な著書

「神学大全」「対異教徒大全」「命題集注解」

このほか、討論集、聖書やアリストテレスの注釈書などがある

#### 「神学大全」の位置づけ

- 信仰と理性を調和させ、カトリック神学を体系づけた西洋中世哲学最大の著作の一つ
- 聖書に由来する伝統的なキリスト教神学と、イスラム世界を経由して伝わった古代ギリシャ以来の哲学の伝統を統合（トマスの総合）。トマスの思想潮流は後世に「トミズム」と名づけられた

稲垣良典・山本芳久編、稲垣良典訳「精選 神学大全1 徳論」(岩波文庫)



高田三郎、稲垣良典ら十数人が約50年の歳月をかけ翻訳した創文社版（45巻、全39冊）が2012年に完結。講談社の「創文社オンデマンド叢書」で読める。今夏、初の文庫化となる全4巻シリーズの1冊「徳論」（岩波文庫）が出るなど関連本の刊行が続く。

の好感という意味の「愛」といった鍵となる概念に注目し、一見相いれない信仰と理性の両方を追い求める中で思想的調和が実現したとみる。「熱烈な宗教性と冷徹な哲学的認識が相互浸透し魅力的な思想が生まれた」本全体に共通する形式のもつリズム感も魅力の一つかもしれない。ページをめくっているとき、不思議と理解が進むような気になり、ぼんやりと「読める」「感覚が芽生えてくる」。

例えば、第1部第2問「神は存在するか」は神の存在証明がテーマ。神が存在するということは自明的なことからであるか（第1項）。神の存在は論証が可能なのか（第2項）。神は存在するか（第3項）。複数の問いが連なり合い、そのつど様々な異論やそれに対する解答などが簡潔に述べられ、小気味がいい。「中世の大学における討論の形式に忠実。問いに対する様々な異論を吟味し、詳細な場合分けと多面的考察を経て、よりパランスがとれた見解に至る。教育的配慮が行き届いている」

著者のトマス・アキナスはどんな思想家なのか。「神学大全」には、聖書や古代末期の神学者アウグスティヌスの言葉だけでなく、キリスト教以前の古代ギリシャの哲学者アリストテレスの言葉も頻出する。昨年刊の「哲学者たちの天球」で新しい中世思想理解を示した哲学史家のアダム・タカハシさんは、トマスの時代以前の思想潮流を説明する。「当時哲学者と言えはアリストテレスで、イスラム知識人イブン・ル

シュド（アヴェロエス）の解釈を通じて知られるようになっていた。神学者の代表はアウグスティヌスで、『神学大全』はその記述を集めたペトルス・ロンバルドゥス『命題集』をもとに書かれた。トマスは信仰を前提に、古代から中世に至る哲学と神学の新たな統合を試みた。16世紀に入ると「神学大全」は宗教改革に対抗するカトリック神学の権威となっていく。

タカハシさんによれば、トマスの影響は「見えにくいが大い」。暗黙の前提として継承や批判の対象となったからだ。「西欧が新たに文化的発展を上げた12世紀から18世紀のカントまで、知識人はラテン語で哲学的思索を積み重ねた。その長き間、トマスたちの中世哲学の知的枠組みが土台となり続けた」例えば、現代イタリアの思想家ジョルジョ・アガンベンは、トマスの天使論を近代の官僚制と関連づけている。「トマスが属した当時新興の修道会、ドミニコ会は異端討伐の先兵だった。天使の階級を論じるくだりは、上意下達の軍隊的組織を思わせる」（タカハシさん）

トマスは4代初めから死の数カ月前まで執筆。「私が見たものに比べれば、これまで書いたものは藪屑のように思われる」などと語り、問答は第3部第90問で中断した。何らかの宗教体験をしたためだとされる。

タカハシさんは「20世紀の哲学があまり扱わない私たちの情念や欲望、あるいは超越的な対象の問題などを論じた」と、トマスの哲学に触れる意義を語る。（大内悟）